

カマツ林の多い低地には、ヌマガヤ (*Moliniopsis japonica* Hayata) が生えていたりする。イヌコリヤナギも、どこかにあるかもしれない。

四国でも、ときにイヌコリヤナギを栽培しており、また近ごろは花屋で見られることもある。そのため、これからさき、ところによって半野生状になることがないともいえない。

なお、コリヤナギの栽培は、以前は四国でも珍しくなかった。高知県日高村では今なおそうとう広い範囲にそのおもかげが残っているが、まったく放棄されたままであるから、見かけは湿地にできた自然のヤナギ林のようになっている。宮脇昭編：日本植生誌四国 (1982) にヤワラスゲーイヌコリヤナギ群落として出ているのは、このコリヤナギ林 (図 1) である。

要するに、ここでの結論は、私の知るかぎりイヌコリヤナギが現在四国に自生しているという確かな証拠はないことである。 (高知大学 教育学部生物学教室)

□Dassanyake, M. D. & F. R. Fosberg (ed.): **A revised handbook to the flora of Ceylon**, Vol. 4, 532 pp. 1983. Amerind Publ. Co., New Delhi. スリランカのフロラの第 4 冊目である。Anacardiaceae, Begoniaceae, Apocynaceae, Asclepiadaceae, Periplocaceae, Aviceniaceae, Nyctanthaceae, Symphoremaceae, Verbenaceae, Campanulaceae, Lobeliaceae, Burmanniaceae, Zingiberaceae の 13 科が記されている。多くの聞きなれない科があるけれど、これは細分された科を使っているためで、Periplocaceae は一般には Asclepiadaceae として扱われており、Aviceniaceae, Symphoremaceae は Verbenaceae として、Nyctanthaceae は問題はあるけれど Verbenaceae の一員として扱われることが多い。日本に関係のあるものとしてはヒルギダマシ、台湾ウオイスギなどがくわしく述べられている。 (山崎 敬)

□小川 真：きのこの自然誌 244 pp., 26 figs. 1983. 築地書館, 東京. ¥1,800. 大見出しは、I. きのこの形, きのこの成長, II. 毒きのこ, 薬になるきのこ, III. 胞子の世界, IV. 菌糸・菌根のこと, V. きのこの栄養のとり方, VI. きのこの分布; きのこの生態, 附・きのこ菌類学。著者は既に多くの著書を出しているのに、手なれた手法でこの随筆を進めている。2~3 の例を挙げると、雷の落とし子, ユダの耳, マツタケ前線は南下する, 笑うきのこ, 聖なるきのこ, 運び屋のなめくじ, プタの好物, 居候, ヒョウタンから駒, 等々である。読んでいて笑ったり, 成程と感心したりで、一杯やりながら頁をめくるには真に相応しい。著者は京都大学農学部で伝統のマツタケの人工栽培に取組み、実験室では既に培養に成功して居り、10 年後には野外で大量に栽培出来るというから、我々は楽しみにしてこれ待つのことにしよう。 (小林義雄)